11. コンピュータと電力

「死に体」の森内閣の目玉のひとつである IT 基本法が施行され、世間もやれ光ファイバーだ DSL だとかまびすしいが、肝心なことがひとつ忘れられているのではないだろうか。

それは電力供給の問題である。ひところ「パソコンもソフトがなければただの箱」といわれたものだが、OS はともかくアプリケーションソフトに関しては、近い将来、個々の端末にインストールするのではなく、ネットワーク上のサーバに置かれてあるものを使うのが通常になるともいわれている。しかし、電力はそうはいかない。「電気がなければただの箱」という状態は未来においても消失することはないであろう。

つい最近、家庭で食器乾燥機と衣類乾燥機とヘアドライヤーを同時に使ってしまったために、久しぶりにブレーカーが落ちた。真っ暗な部屋の中で、いまさらながらに電力への依存ということを思い知らされた晩であった。そういえばということで、カリフォルニアで今年になって大停電が発生したという新聞記事を思い出した。カリフォルニアでは以前から電力供給が危機的状態にあるといわれていたのだが、それが大規模な停電という形で顕在化したのである。アメリカでは電力供給は自由化されており、その過当競争が直接の原因であるとされている。しかし、根本にある原因が電力消費の増大であることはまちがいないであろう。カリフォルニアはシリコンバレーを擁する全米でも「IT 度」（嫌な言葉だ）の高いところである。もちろん食器洗い機やドライヤーに比べればコンピュータの必要とする電力はわずかなものでしかない。それでも、多数の住民が新しい情報機器を一挙に使い始めたことによる電力需要の増加は無視できるものではないはずである。

少し前に建てられた住宅や学校の建物を利用している人ならおわかりだろうが、最近になって困惑することが多いのは電気コンセントの数の少なさである。いきおい、テーブルタップのようなものを使って蛸足配線を強いられることになる。私が初めて研究室というものをあてがわれた時、部屋にふたつしかないコンセントには、電気スタンドだけがささっていた。それが今の研究室では、パソコン本体、モニタ、各種外付けドライブ、プリンタ、ネットワークハブ、FAX 電話などなど、気が遠くなるくらいの数の電気製品が電力供給を要求している。たしかに今の部屋でも最大の電気食いがエアコンであることはまちがいなく、それはそれで問題にすべきことなのだが、絡まりあった電源コードを見るにつけ、ためいきがもれる日々ではある。家庭でも、10 年前にはなかった電気器具がどれだけあるかを数えてみられたい。まもなくそれに、インターネット常時接続のための装置が加わるはずであり、またオフィスがそうなりつつあるようにパソコンも一日中つけっぱなしの状態になることはほぼ確実である。

どういうわけか電気はクリーンなエネルギーだと思われている節があって、駆動用のバッテリーを搭載したハイブリッドカーなるものもエコブームのなかでけっこう売れているようだ。しかし、その電気がどうやって作られているのかを考えたならば、あまりうれしがってもおられまい。私としては、脱原発社会や脱ダム社会というものを歓迎したいのだが、そう思いつつも毎日多くのスイッチを入れることはやめられない。ひところ話題になった常温核融合や超伝導などの技術も即戦力になる見通しがなく、代替エネルギーの話もあまり期待できないようだ。今やライフラインにもなぞらえられる電子ネットワークの維持も電気があってこそのことである。無意識的な

依存という状態になる前に考えておくべきことは多いだろう。

少し無茶な提案なのだが、年に一日だけ、病院や交通などの公的施設をのぞいて電力供給を完全にストップする日というのを作ってみてはどうだろう。イスラム教のラマダンという断食の習慣は、飢えた人々のことを思い、日々の食の恵みに感謝する気持ちを涵養するためにあるらしい。ノーカーデーというのもあるが、これは強制力がないためにほぼ失敗している。その点、電気は一挙に供給を遮断することができる。季節を選び、病人などへのケアを前もってしておけば、水道に比べて全く無理な話でもないと思うがどうであろう。実際、私が子供であったころは、年に二度や三度の停電は普通であり、ロウソクの火を灯して少しはしゃぎながら夕食を食べた記憶は今でも残っている。なによりこれは阪神・淡路大震災の尊い教訓を忘れないためのトレーニングにもなるだろうし、電力への過度の依存を反省するよいチャンスでもある。

私の勤務校では、施設の老朽化のせいか最低年一回は停電によるネットワークのダウンがあるが、そのことは、「湯水のように」ネットワークを使っている末端のクライアントたちに、ほぼボランタリーに活動しているネットワーク管理者の貴重な努力を思い出させる機会にもなっている。ネットワークがダウンしているときに急ぎのメールを送らなければいけないとあせっている同僚に、「電話をかけたら」と勧めて互いに大笑いしたことも思い出す。

(2001 年 4 月号)